

立教大学 社会福祉ニュース

第一号 昭和43年 8月 1日発行 編集発行人岩井祐彦 東京都豊島区西池袋3立教大学社会福祉研究所

発刊のことば

所長 岩井 祐彦

研究所設立一年をへて、社会福祉ニュースを発刊する運びとなった。この間に与えられた大学内外の援助に対して心から感謝する気持ち一杯である。

研究所設立の構想は、四年ペンシルバニア大学社会事業大学院在学中に生れ、帰国后同僚達の賛同と参加によって形をなした。ペン大における研修を終り、北欧・英国を巡り、社会事業教育と研究機関を視察し、特に二つのINSTITUTEに強烈な印象をうけた。一つはオランダのINSTITUTE FOR SOCIAL STUDIESで、人間福祉の実現という視点にたつて諸社会科学を動員し、総合的な地域開発の理論と実際を追求しているもので、旧来の社会福祉の概念を大幅に変容させる実践活動をしている。他は英国のTAVISTOCK INSTITUTEであって、精神分析者を中心とする諸専門家によるチームによって、人間殊に家族福祉の研究に従事している。その充実したクリニックでの徹底した臨床的接近の成果は、英国全体の地域福祉活動の支えとなっている。又両者は実に充実した専門職養成のプログラムをもつ。

共通に見られることは、視点を「人間の福祉」におき、片時もそこから目を離さない禁欲的態度であり、方法として総合的臨床的であること。総合的であることについては特に説明を要しないが、臨床的ということについては説明を要する。

臨床的 Clinical とは、ヨーロッパ中世における聖職者の独自の役割を意味した。病者の身体的苦闘が終りに近づき死に臨むことが認められる時、全き孤独の不安におのゝく精神を創造者たる神との出合へと導く営みである。このように臨床的とは、人間に対する全的配慮の態度を示すことばである。

我々は、臨床的という言葉で、「関与による人間に対する全的把握」(配慮)という意味に理解する。精神は身体を離れたモノではなく、社会は個人の外にあるモノでもない。

我々の営みは、総合的臨床的方法による人間福祉実現に寄与することの念願に発しており、どこまでも人間に則し探索的(Exploratory)であり、固定化した概念に把われまい。

本号は研究所の歩みの全貌を伝える意図から編集されている。今後の歩みに対して諸賢の支持鞭達を期待してやみません。

コペンハーゲンの一日

—訪欧日記から—



早坂 泰次郎

1967年10月14日

7時ごろ眼がさめる。ホテルの食堂で朝食ののち、8時20分頃ホテルを出る。陽は高く晴天だが、風がさすがに刺すように冷い。シティ・ホール前の広場まで徒歩で7・8分かかる。合服の背広にスプリング・コートだけだとすぐ身体が冷えてくる。時間があるので、観光バスの発着場でもある記念碑前の、パレス・ホテルの食堂に入る。ルネッサンス・スタイルの立派なホテルだ。9時5分前にバスが来たので出る。チップを含め10クローネは無駄だった。しかしこのあたりには(日本なら喫茶店や食堂がい集していそうな場所がらなのに)他にほとんどないのだからしかたがない。

バスには先客が二人いる。話してみるとアメリカから来た開業医夫婦。品のいい連中だ。旦那がニコマートをぶらさげているので、しばらくカメラ談議をしているうちに、夫人も会話に入ってきて「日本でも女性はミニスカートをはいていますか?」という。「一部にはいますよ」と答えると肩をすくめ「きっとテレビの影響でしょうけど、いやな趣味ですね。でも親たちも認めているでしょうね」という。「そこが問題なのです。親子の間に世代の断層があるのです」と私が答えたことから、しばらく世代論議になる。そのうちに中老のイタリー人が小生の隣席を指し「こゝい、ですか?」と言って座った。しきりに話しかけてくるがイタリーなまりの強い英語で、余り良くわからない。ロンドンに長くいたというのだが。わからない時は適当に当りさわりのない答えをしておく。私のことを「あなたは学生か?」と聞くので「大学で教えている」といったら助手か講師と了解したらしい。

「明日の世界」の見学

9時20分出発。「明日の世界」と名付けられたこのコースは、社会福祉関係の施設だけをめぐる観光バスで、今年が今日で最後だという。それはヨーロッパの夏の観光シーズンが今日で終ることも意味している。まことに幸運だった。ガイドは50がらみの男だが「一見教授風」の、堂々たる押し出しだ。走り出して4・5分もすると赤レンガの——コペンハーゲンの町はいたるところ赤レンガの建物だが——こじんまりした建物の前でとまる。経営者の組合（ユニオン）だという。「デンマークでは、市民はほとんど一人残らず何かのユニオンに所属している。ここは経営者のユニオンだが、労働者はもちろん労働組合をつくっているし、学生は学生のユニオン、看護婦は看護婦のユニオン、商人は商人の、病人は病人のユニオンに入っている。ストライキもあるが、ほとんど数時間から一日位でケリがつく。例外的、8年前に7週間のストが一回だけあった。」という説明があったあと、バスは再び動き出す。間もなく「ここはコペンハーゲンのスラム地域だということを通ったが、赤レンガの45階のアパートメントがひっそりとならぶ、静かで清潔な町すじだった。やがて大きな病院の横にさしかる。「デンマークの病院はcommunity hospital, county hospital, state hospital の三種類にわかれ、いずれも入院料は10クローネ（約530円）ですべてがまかなわれる。王室の人々も病気になれば同じ病院を同じようにつかう」という説明がある。そのうちにバスは、昨日私が一人で訪問した大学病院横の、静かな交叉点で止る。ガイドによれば「ここはずっと以前、練兵場だった。1872年にここで、軍隊及び警察官と労働者との衝突が起った。その時のリーダーの一人が、当時18才のJakob Rietz だった。あなたがたのなかで、アメリカから来た人ならこの名前を知っている筈だ。この衝突で多くの人々が捕えられ、Rietz はニュー・ヨークに亡命し、1820年にニュー・ヨークで死ぬまでアメリカに住んだ。しかし、とにかくこれがデンマークの社会改革のはじまりだった、という。

第1の訪問先は「年寄りの町」だった。デンマークには300年前から職人のギルドの老人用施設はあったが、一般の老人のためのものは40年前に120名の収容者をもってはじまり、今では2000名の老人たちが一つの地区をもらって生活をしている。夫婦の場合、男67才女62才から年金が与えられ、月額は1,200クローネ

から2,000クローネである。単身者の場合には3割減じられる。なお病人の場合には年齢制限はないという。

「全市民がこの制度のために、収入の3%を支出している」とガイドはいったが、個々の市民の税負担は相当なものにちがいないと思う。昨日訪問したコペンハーゲン大学医学部附属看護学校の校務主任は「私は一年に5万クローネもらうが、そのうち2万クローネは税金です。年収2万4000クローネ以下なら税は安いけれども、それ以上になるとグンとはね上る」と言っていた。

完備された施設

われわれ一全部で40名ほど一観光客は老人ホームの一つを訪問し、ロビーから私室にいたるまで見せてもらう。モデル・ホームではあろうが、ゆきとどいたケアのなかに、プライベートシへの配慮がうかがわれ、老人の大多数がこうした生活をしているのだとすればたいしたものだった。

30分ほどしてふたたび出発するとすぐに、バスは看護婦のユニオン（看護協会とは別にある）の横を通る。9階建ぐらいの大ビルディングで、宿泊設備ももっているという。その近くにはコペンハーゲン大学の寄宿舍がある。夏のシーズンの間はホテルにもなるという。きれいな建物である。こゝでわがガイドの説明に又熱がこもる。「デンマークでは、大学は200年前から授業料は無料である。学生は教科書代だけを負担すればよい。小学校から高校までは一切が無料である。ところで、古手の大きな建物をよく見てほしい。1872年に、労働組合の結成と並行して、一人の牧師がDANISH ASSOCIATION FOR INVALID AND HANDICAPPED を組織した。この建物はその組合に属し、その中には組合員のためのアパートメント、ホテル、リハビリテーション施設がある。現在ではこの組合は12の施設ももっている。こゝにある建物のほか、病院が二つに、いくつかの工場があり、家具、木工、洋服、精密機械からラジオやTVにいたるまで、はばひろい種類の生産をおこなっている」という。

バスはやがて動物病院の横を通る。動物愛護協会の経営だという。ガイドによれば、デンマークでは動物を虐待するときびしく処罰され、投獄されることさえあるという。盛り場にさえ見られる鳩と人間の睦みあいのかげに、そうしたきびしさがかくされていることは興味が深い。

そのうち工場地帯にさしかかる。この辺はコペンハーゲン市外である。工場は全部週5日制だそうで、土曜日の今日はどこも静まりかえっている。デンマークの主な

産業は鉄鋼、金属、木工だが、原料は全部輸入し、加工して輸出している。デンマーク自体にある資源は赤レンガ用の粘土しかない。木工の原料などはタイ国である。それでも産業は盛んで、「セメント製造では世界一の事業所がある」とガイドは言ったが、これはどうもハッタリのようなのだ。われわれのバスは新興工業地域であるグラドサクス(Gladsaxe)市の幼稚園の前でとまる。幼稚園は2才以下、2才-5才、5才-7才の三段階にわかれているが、ここでは2才-7才までのこどもを扱っており、市営で、保育料は毎週28クローネ(約1400円)だという。やすくはないが、園児60名に、11名のスタッフ(うち4名は教員有資格者)というのは、日本の標準からみれば豪華といえそうだ。この日はやすみだというが、よく整った園児室で、金髪の若い保母たちが、数名のこどもたちとあそんでいた。

教育の美しい伝統

幼稚園の次に、われわれは学校をたづねた。ここでもまたガイドは雄弁になった。空いた教室のこどもたちの机にこしかけたわれわれに、彼は教卓からデンマークの教育制度のあらましを話してくれた。

デンマークは、1814年に世界ではじめての義務教育制度をスタートさせた。現在の学校制度は次のようになっている。小学校は6年制で7才ではじまる。中学は2年、高校は4年だが、大学進学の場合は、高校2年終了後入試を受けることになる。非進学者はReal School(実業高校)を卒業後実社会へ出る。進学者の場合には、入試合格後4年間の予科(理数、現代語、古典語の3コースにわかれる)を終了後、19才で学部に進む。学部は卒業に最低5年から7年かゝるといふ。しかも、大学入試は大変むづかしいそうである。大学というものに対するヨーロッパの人々のきびしい考えかたが、ここにもはっきりうかがわれる。

われわれがたづねたこの学校は、小学校から高校まで(7-17才)のこどもたち1100名を収容している。授業日数は年間240日である。デンマークではどこでも、学童を夏休みに農家に招待する習慣がある。これは80年来の、デンマークの「美しい伝統」で、この場合の汽車賃はタゞであるという。われわれのガイドはこの習慣について、「これによって豪農の家族と都市労働者の子弟が話しあうという、社会的意味があるのです」とつけ加えた。

観光バスの訪問予定はこれで終りだった。コペンハーゲンへ向ってひた走るハイウエーの両側にはグリーンも

あざやかな牧場や、今では少なくなった、昔風の大きな農家が、林の中に点在していた。

静かな平和の庭

正午まえにシティ・ホールの広場にもどる。何世紀も前の古めかしい建物に囲まれた静かな広場が大変賑やかに感じられる。となりのイタリー人は演劇批評家だそうで、「一時から演劇がはじまる」と、そゝくさと消えていった。バスをおりてシティ・ホールの前を通りすぎようとしたら、今朝の米人医師がおりかけてきて、「このホールの中に有名な時計があるのを案内書で知ったのですが、あなたも一緒に見ませんか?」という。好意を謝し、同行する。入場料1クローネ。12時からホールのガイドが説明するという。拵えむきのタイミングだ。以下はガイドによる。この時計は3000年に4秒しか狂わないようにつくられている。この時計には同時に世界ちゅうのおもな都市(私の顔をみながら、「多分一番重要な場所トウキョウもね」といゝながらニヤリとしてみせる)の時間、諸惑星の現在位置、今日の潮の満干の時間、地球・太陽・月の現在位置、星座のうごき、ジュリアン暦日等々があらわされている。そして一切ゼンマイじかけでうごくしくみになっている。

12時半、米人夫婦と握手してわかれる。一旦ホテルへ帰りかけたが土曜だと思い出し、あわて、タクシーでCVJM(YMCA)へゆく。手紙のアドレスがそこになっているからだ。しまっているがノツプをがたがたやっていると例の青年が出てきて、手紙はないという。残念。

あと市電16番にのり走ってみるが、これというところもない。帰途墓地の入口で下り、散歩。ドイツ語のFRIEDHOF(平和の庭の意味、墓のこと)ということばがいかにピッタリする、静かな憩いの場所である。墓石の両側にベンチをおいた墓所がとくに印象的だった。

日航でフィルムを送ろうと思い、寄ってみたがやはりしまっていた。

14:30帰室。うちへの手紙のつゞきをかき、16:00に写真屋へいってみる。一昨日現像と白黒のベタ焼をたのんだら土曜日の4時に、といったのだがやっぱりしまっている。イタリアの一本あきらめる。明日の出発には間にあわない。

VESTERBROGADEを少し散歩する。4時半ごろ例のセルフ・サービス・ショップでサンドイッチとビールで早い夕食をとる。5時すぎに帰室。明日のために荷物の整理やらバスやら。



スーパービジョン研修会ひらく

平山 尚氏を迎えて

研究所主催の「スーパービジョン研修会」は、アメリカ・フィラデルフィア市で活躍されている平山尚氏を迎えて4月23日、4月30日、5月7日の三回にわたり立教大学で開催された。

家庭裁判所、児童相談所、国立公衆衛生院、保健所、病院、東京都民生局、大学関係者など、社会福祉活動に従事している人や研究者など毎回30名が参加した。

第1回目は、平山尚氏から13年ぶりに帰国された印象と日本の社会的変動の観察が述べられ、とくにアメリカ社会の家族観察との比較をされた。ついで、アメリカにおけるソーシャル・ワークの現状と将来の見通しについて述べられ、福祉国家として行うべき社会福祉の技術開発や、地域社会の発展にともなう福祉のあり方について問題を提出された。とくにGroup Treatment, Family Therapy, Impact Therapy, Marathon Therapy, Behavior Therapyなどの方法と、Community Mental Health(地域社会精神衛生)の発展とその意義について述べられた。

参加者側からは、各自の仕事の内容紹介と、ソーシャル・ワークについての考えを討論し、スーパービジョンの問題を提出した。

第2回目は、スーパービジョンの理論と実際と題して講義が行われた。

スーパービジョンの歴史的発展をたどりながら、現代の問題点の指摘があった。19世紀後半におけるアメリカ、イギリスでソーシャル・ワーカーの訓練として発展してきた事実の詳細な説明があった。現代の問題点としては、スーパービジョンは教育的機能をもつと主張する派と、管理的機能であると主張する考えとの対立抗争点を明確にしなが、スーパービジョンの内容とその方法が紹介された。スーパービジョンは管理職であり、教育はその一部であるという考えもあるが、どのようにすれば効果的なサービスができるかという点において、ケース・ワークの仕事を進めるための援助機能として考えるべきであり、そこには分離して考えられないものがあると述べられた。

スタッフ養成の訓練としては、ワーカーの性格、知力、理論の応用能力、協同性、自分自身をみつめる能力、新しいものを学んでいくための不安を克服して創造的なはたらきがどの程度できるかといった諸点に配慮をして行い、サービスを効果的に行うための組織構造の理解をす

ることも必要であると強調された。

質疑応答、討議においては、スーパーバイザーの組織における位置と役割、ケース・ワーカーとの関係などについて活潑な意見の交換があった。

第3回目は、本研究所員梶原達観氏のケースを素材として、平山氏がスーパーバイザーの役割をとり、スーパービジョンの実習を行った。

非行少年の事例に対して調査官はケース・ワーカーの立場をとって面接活動をした報告が行われ、それに対して、スーパービジョンを行ったのである。スーパーバイザーが強調したことは、第一にこのケースの中で、もっとも重要な問題は何かということを確認にすることである。そして慎重な態度でデータを収集し、その分析をしていくことである。

さらに平山氏が強調した点は、スーパーバイザーとケース・ワーカーとの人間関係がうまく行われていることの重要性であり、相互に信頼関係が形成されていることが大切であると述べられた。

参加者は、種々の質問をしてスーパービジョンの方法を体験的に学び今後の活動に役立つものが多くあった。

研究所としては、「スーパービジョン研修会」を今後も要望に応じて開催し、ひろく日本の社会福祉活動に貢献するよう準備をしている。

ケース・ワークを自分のものに、 平山氏日本の印象を語る

3回にわたってスーパービジョンの研修会を指導して下さった平山尚氏は、研修会が終了した翌々日空路帰米された。日本に滞在中は、多くのソーシャル・ワーカーと懇談された。その印象を離日される前に語ってもらった。

「日本に来て驚いたのは、ケース・ワーカーと話をしていた、その人自身の考えや言葉でケース・ワークを語っていないことでした。ケース・ワークが自分自身のものになっていないという印象です。誰かが言った言葉を模倣したり、著名な西洋の学者の言葉を借りて自分の考えを代弁するような人が多かったことです。ワーカーの資格と専門性を言うときには、もっともっと各自の考えや態度が確立してほしいと思います。

日本のケース・ワーカーに望むことは、自分自身の理解でケース・ワークをしていくことだと思います。他人の模倣でなく、自分で作りあげていくケース・ワークでありたいと思います。」

家族研究グループの近況

昭和41年始め頃より岩井教授を中心として、社会福祉に関心を持つ、学者、現場のソーシャル・ワーカー、精神科医、大学院学生等が集って自然発生的に、人間の福祉について語り合ううちに、家族の問題が焦点となって来た。その様な雰囲気の中で研究会を持とうということになり、ファミリー・スタディー・グループと名づけて昭和41年6月11日に第1回の研究会を開いた。

以後月に2回、第2、4の土曜日午後2時30分より2時間、研究会を開いて来たが、年末年始を除いて、休暇中も必ず研究会を続けて来た。

このことは、人間の福祉に自分自身をかけるという参加者全員の同一性に依るものと思われる。

参加者は本学関係者に限らず、学者、学生、ソーシャル・ワーカー、立教小・中・高校の教師、精神科医、心理学者等、多彩な顔ぶれであるが、参加することに責任を持つということと、それぞれの領域からチームとして協力研究すると言うことでまとまりを持っている。

研究会は、主として現場のワーカーや教師、精神科医等による臨床チームの研究討論であるが、その特徴は次の通りである。

1. 家族関係を中心としているが、基本的には相互人間関係を問題としている。
2. 自分自身を使って、家族なり個人を確める方法がとられている。
3. 家族は全体として1つの力動体であるという見方をしている。
4. 社会福祉の理論と実践の統合を試みている。

今後の課題としては、絶えず変化して行く家族や社会が投げかけるニーズに、どの様に適合出来る研究会たらしめるかということである。

継続家族研究

昭和40年末、社会福祉に関心を持つ卒業生、大学院生が数名集って、家族研究を続けていたが、社会福祉研究所の発展と共に、研究所の事業として、研究の目的・方法・参加者等を再構成し、研究所としての同一性を持った家族研究計画を発足させた。

第1回 昭和42年度研究は、都内の或る母子寮内の母子家族を対象として、母子家族の精神衛生のために、研究所が援助することを目的として始めたが、その目的を果すための接衝、面接、心理テスト等の一連の過程で

生起する問題を手がかりとして、家族成員、家族、寮などの姿を浮き彫りにするよう努力した。

結果については現在整理中であり、諸種の学会に発表する予定であるが、特筆すべきは、我々が個人や家族関係の内面から人間としての真実の姿をつかみ、福祉の実現に寄与しようと努め、特殊な構造のもとで行われたテスト、面接による統合的な研究方法をとったことである。

この種の家族研究は、特にわが国に於ては困難を伴うのが常であり、研究の例も極めて数少ない。

参加者は、大学院生、大学職員、社会福祉事務所、児童相談所等、ソーシャル・ワーカー、医療ソーシャル・ワーカー(MSW)、主婦、家裁調査官、大学医学部精神科医、心理学者等12名である。(梶原 達観記)

本格化した相談活動

毎土曜、相談所で

研究所の主要事業の一つ、地域社会に対するサービスとして注目されていた、相談活動は、いよいよ本格的な活動に入った。

一般市民の依頼によって、家庭関係の諸問題、心理治療的問題、精神衛生など、研究所員の専門分野に応じてどんな問題でも相談活動ができるよう、態勢をととのえている。一般市民の方々が気軽な気持ちで利用されるよう期待しているが、すでに十数ケースが受付けられている。

相談活動は、毎週土曜日午前10時から午後5時まで、学内の「学生相談所」で行っている。

相談希望者は、原則として事前に研究所へ連絡することが望ましい。あらかじめ電話などで予約をすると便利である。電話は立教大学(983-0111)内線272(岩井)、と内線595(早坂)にかければよい。

費用については、最初の受付け面接は無料で、その後の面接相談は一時間約500円程度の相談料になる。ただし、ケースによって、また特別な事情によっては無料で行われる。



ドンネル会の動向

毎週水曜日午後の早坂研究室では、和気藪々とした中にも白熱したディスカッションが展開される。満1才となったドンネル会(Donnerstag 昨年は木曜日に開かれていた)は、ますます育ち盛り、早坂先生を交え6名の会員に、今年は新たに3名が加わり、将来の成長ぶりが楽しみになって来た。

昨年の主な活動は、S・M・ジャラードの“The Transparent Self”の詳読会の成果をまとめて、看護学雑誌に4回に分載した。その内容は次の通りである。

1. 看護を殺すベッドサイド・マナー
長谷川, 早坂 昭和42年10月1日
 2. 専門的と人間的
松浦 昭和42年11月1日
 3. 精神衛生を看護にとり入れよう
早坂, 鈴木 昭和42年12月10日
 4. 病気と治療にかかわる問題
早坂, 長谷川 昭和43年2月10日
- また「世代論——歪められた人間の理解——」と題する本がYMC A出版から出された。
早坂, 長谷川, 戸塚, 松浦 昭和42年11月25日

昨年の詳読会中心から趣向を変えて、今年は各自が興味ある問題についてリポーターとなって話題を提出し、ディスカッションの中から「何ものか」を引き出していくようになり、会全体がより生々として来た。メンバーは、社会学・心理学出身者ないしは現在勉強中の者が多く、興味の範囲も、医療・看護・非行・家庭・産業・集団・共同体論……と様々である。しかし、その多様性がコミュニケーションを阻害しないのは、それらの焦点にいつも「人間」があり、絶えず「人間に於ける——」の意味が問われるからであろうか。

今年はずでに3回の会がもたれたが、

1. フロムの間観(鈴木)
 2. 共同体に於ける人間と社会(足立)
 3. 患者の心理的研究
 4. 人間把握の様々な方法について(大根田)
- 等がその内容である。

ドンネル会の場を通して、各自の問題がより明確になり、啓発され、練磨され、耕やされ、あるいは自己の内部の何ものかがひき出され、内面的な革命がひきおこされること、各自の内部でそれらは様々な形をなし、発展の途をたどるであろうが、各々の内奥に動いていくもの

に本当の価値を置きたいと考えている。ドンネル会の表面上の業績は、実のところそれらの「動き」の排泄物にすぎない。しかしまた、その排泄物が人間に関わるあらゆる理論と実践の場にある基本的なValueのようなものを含むならば、それは「不用なもの」ではなく「コヤシ」となることができよう。

最後に、ドンネル会は熱心な小グループにありがちなセクト主義や自己満足には陥入りたくない。グループの人間関係の「柔らかさ」は、枠組の柔らかさにも通じるもので、出席、欠席は自由。門戸は広く開られている。どなたでも自由に仲間に加ってディスカスしていただきたい。

(テーマの問合せは983-0111内線595へ)

精神分析ゼミナール

毎土曜ひらく

本研究所のプロジェクトの一つである、土曜日のゼミナールが、昨年に引き続き午後1時より行われている。

河合洋氏(本研究所々員、大泉病院医局長、慶応大学神経科)を中心に、毎週熱心な講義や討論が展開されている。

昨年は「精神分析の基礎理論」と題する連続講義により、精神分析の理論、及びその方法論を中心として学習が続けられた。

本年度は、先ず“Psychoanalysis and Social Sciences”(Ed. By H. M. Ruitenbeek)をテキストにして、精神分析理論の社会諸科学への導入状況について、特に政治学、社会学、文化人類学等の分野について、ゼミナール形式で行われている。既にH. D. Lasswellの“Impact of Psychoanalytic Thinking on the Social Sciences”を読み終り、引き続いて、T. Parsonsの“Psychoanalysis and the Social Structure”という論文を読んでいる。

本ゼミナールの参加者は、Post-graduateを対象にして、各自の自主的研究が義務づけられているが、今後の計画とし学内公開講座制、更には一般公開講座制等の計画も検討されている。

今日、社会諸科学における精神分析理論の導入は極めて速い速度で、しかも深くなりつつある。特に、歴史的にその進歩を共にして来た社会福祉の各領域にある者にとって、これを理解することは不可欠の条件と言えよう。しかし、本来神経症の“治療”に端を発した精神分析の理論を、基礎的に、方法論として適切に教授することは、我が国の教育界の弱点であったと言える。この意味で、

豊富な臨床例と、社会科学への深い洞察を有する河合氏を迎えた、本ゼミナールは、斯界に貢献する所、多大であると見えよう。(明星 晃)

精神薄弱研究グループ

OBを中心に発足

このグループは、精神薄弱児者の仕事に従事している、卒業後未だ日の浅い施設指導員や、児童相談所や福祉事務所の職員をしているOBたちの発案によって出発したのである。各種の機関に所属する者が、精神薄弱問題の研究を共通の基盤として、広く情報の交換、連けいの強化を計り、日々直面している問題について共に語り、文献を探り研究して行くことを目的とし関係者に呼びかけることになった。現在、少なからぬOBが研究、福祉、相談、教育、行政の各方面の精薄関係機関で職務について広く活躍している。そうした機関にいる者が、共通の問題を探り乍ら、各々特殊の問題と情報を交換し教示し合うことによって、精神薄弱研究発展の為にベストを尽したいという気持ちに賛同する方々の参加を期待している。

第1回会合で、次のことが話された。

1. グループの性格に関して
2. 定期会に関して
3. 定期刊行物発行に関して
4. 第2回会合の資料となるアンケートに関して
5. 参加希望者、依頼者に関して
6. 暫定幹事に関する件

この日は出席者が4名に止ったので、上記事項に関しては決定ではなく、基本案として次回に提案することになった。但し、第4項に関しては、早速実行することとなった。次の各項について多少詳説する。

1. グループの性格

グループの性格に関しては、単に連絡と親睦を中心として、自由な討論を主体とし、学問研究の性格を帯びないようなものにといい意見と、各自が現場で直面している問題に、何等かの指針と、学問的研究の方向性を与えることができる、程度の高い性格を持つ様にとの大別して2通の意見が述べられた。しかし、結論は次回にゆずることとし、その為に、次回会合に間に合せて別記アンケートをまとめることになった。

2. 定期会について

定期的な会合は、5月に始って隔月の第3土曜日、即ち下記の様な案を作った。ただし5月は下記通り行うことにした。

5月18日 7月20日
9月21日 11月16日
1月18日 3月15日

時間は午後2時より4時までの予定。

3. 刊行物発行について

会の行われない月には、各自の研究レポート、或は現場からの各種のレポートを寄せて、刊行する案。特に学問的なレポートに限らず、職場に於る日常的な問題や、随筆でも構わないものとする。各自の活躍状況の伺えるレポートを掲載する。

4. アンケートについて

第2回会合の内容は、グループの性格を決めることとも関係して来る。そこで5月の会合では、現在の活躍状況を中心とするアンケートをパンフレットにして基礎資料として討議する案。これは早速実行することになった。

5. 参加依頼者、希望者について

現在、グループに参加していないOBの中にも、この問題領域の仕事に従事している者は多い。こうした方々にも、今後メンバーとして、或は講師としての参加をああおいでいきたい。又、自発的に参加を希望する方々には、暫定幹事に連絡するか、或は直接会合に出席されたい。現在直接この領域に従事していなくても、強い関心を抱き、共に研究して行く意欲のある方が、多勢参加されることを願っている。連絡先—983—0111 内線272 岩井研究室・明星 晃。

グループ・ワーク研究班

月例会を続行

グループ・ワーク研究班は、毎月1回第4土曜の午後に研究会をもち、内外の文献紹介と活動報告の研究発表を行っている。

本年はすでに「アージュリスの理論紹介」「勤労青年合宿訓練にグループ・ワーク法を適用した事例研究」「コミュニティの概念規定について」などを主要題目として研究活動をつづけてきた。

5月例会には、日本女子大学助教授吉沢英子氏が発題して「グループ・ワークの定義分析」について研究討議を行った。現代ではケース・ワーク、グループ・ワーク、コミュニティ・オーガニゼーションといった系列で分類していく方法よりも、共通の基盤に立った人間関係の理解をふかめる方法であり、関係存在としての人間関係の分析研究と、実際活動では単なる集団操縦の一技法としてではなく教育福祉学の方法論としての研究が盛んになってきていることが話し合われた。

今回は「戦後日本の青少年グループ活動の変遷と今後の問題」をテーマとしてとりあげ、日本YMCA同盟研究所主事松本勉氏が研究発表をする予定である。

秋にはグループ心理療法とグループ・ワーク、婦人地域活動と小グループ、リーダーシップ開発の研究などを主題に研究をすすめていく予定である。さらに実態調査によるグループ・ワークの研究をも計画している。参加者はグループ・ワークを担当している大学教員、産業界社会福祉、社会教育団体の指導者など毎回20名である。
(坂口 順治)

積極的に協力

深川勤労センターの活動

東京深川の木場に勤労青少年センターが誕生した。日本聖公会東京教区深川聖救主教会が、地方から東京に就職した勤労青年の憩いの場として、青年の集まるセンターを今春設立した。四階建のビルで、読書室、音楽室、茶花室、講堂など、レクリエーション設備も完備された近代的建物である。

このセンターの運営に関しては、当研究所も積極的に協力して勤労青少年センターの活動をもりたてていくことにしている。岩井祐彦所長と坂口順治所員はセンター運営委員会のメンバーに加わり、岩井所長は同センターに相談室を設け、家族問題などを中心にした一般のカウンセリングを担当している。また、鈴木育三研究生が青少年の相談活動も行っている。坂口所員は、センター協力主事としてセンター活動のプログラム開発やグループ活動の運営について協力している。

現在、センターを活用している勤労青年は約350名でそのうちの7割が男子であり、ほとんどが地方出身者で会社の寮などに寄宿している。

センター会員の自主的なグループとしては、器楽部、ボデイビル部、詩吟部、卓球部、野球部、エスペラント同好会、英会話クラブなどが結成されて活動している。一方、勤労青少年のための教養講座を開き、働きながら学んでいく人たちの勉強の機会をも提供している。英会話、お花、編物、料理教室などが毎週行われている。

大学問題への関与

本研究所は、所長・副所長の岩井・早坂両教授が、昭和34年—38年、立教大学学生部部長、副部長としての責任をとった経験から、大学の問題に深い関心をもつて来たが、今回立教大学学生部職員中谷達次郎氏を研究生として受け入れた。同君の研究テーマは、“STUDENT PERSONNEL SERVICE の方法に関する研究”であり、期間は5月より来年3月までとする。

S. P. S. は日本に導入されて20年余を経て、反省と新しい枠組の探求を要請している。従来のS. P. S. の欠陥と思われる点は、個人、集団、大学全体の問題が一貫性をもって扱えられず、従って各大学において、学生相談所の活動とサークル指導、更には諸集団の関係やその総体の問題に対する活動の間に、何らの関連性が見られなかったことに着目し、新しいパースペクティブから扱えなおそうとしている。

新しいパースペクティブとは、ソーシャル・ワーク・パースペクティブであり(Social work が長年にわたって発展させて来た)、Social Casework, Social group work, Community organization という方法を、大学という場面に応用してみる試みである。岩井所長が一応責任をもっているプログラムであるが、幾多の困難な問題を孕んではいるが、所員と学生部員の協同研究の生産的であることを期待している。

研究所スタッフ紹介

- 所 長 岩井祐彦教授—カウンセリング
- 副所長 早坂泰次郎教授—実存心理学
- 所 員 梶原達観講師—家裁調査官、横浜家裁川崎支部勤務。
- 所 員 坂口順治講師—グループワーク
- 所 員 西山茂子講師—ケースワーク
- 所 員 河合 洋講師—精神科医、慶応大学病院神経科、大泉病院医局長
- 所 員 江口篤寿講師—立教学院診療所医師、健康管理学
- 所 員 長谷川 浩—日本獣医畜産大学講師、臨床心理学
- 所 員 西村哲郎—立教中学チャプレン、教育心理学
- 所 員 相沢二郎—埼玉県川越児童相談所措置課長、臨床社会学
- 所 員 桜井芳郎講師—国立精神衛生研究所精薄部次長、臨床社会学、P. S. W.
- 研究員 戸塚悌子—相談心理学
- ” 服部 建—家裁調査官、東京家裁勤務、ファミリーケースワーク
- ” 大原知子—立教大学学生相談所員、ケースワーク
- ” 水上秋晴—川越児童相談所